

新進研究者 Research Note

根元的解釈の基礎について
On The Basis of Radical Interpretation

中谷内悠

Abstract

In this paper, I consider Davidson's thought on a theory of interpretation of meaning, that is a theory of radical interpretation. One important criterion for a theory of interpretation to be good is that meaning is appropriately interpreted from the basis of interpretation. The other is that the basis of interpretation can be easily known based on observed facts by an interpreter. I show that the theory of interpretation presented by Davidson meets the first criterion, but does not meet the second criterion.

(1) 研究テーマ

この論文は、どのようにして意味（や命題的態度の内容）という概念に良い説明を与えられるか、という問題に関わる。例えば、ある未知のことばを話す外国人が、ある文を発したのを見て、私は同じ文を使って彼に聞き返したとする。もしそのとき彼がうなずけば、彼はその未知な文を真だとみなしていることがわかるだろう。つまり、行為者がある文を真とみなしているかどうかは、観察された事実をもとに、じかに知ることができる。しかし彼のふるまいを見て、その文が何を意味するのかということまで知ることはできない。このように、意味は観察可能な証拠からじかに知りうるものではないのである。この意味で、意味（や命題的態度の内容）という概念は、私たちにとって理解しづらい概念である。そして、意味（や命題的態度の内容）という概念を、観察可能な証拠からじかに適用可能な概念によって説明することは、それらの概念をより理解しやすい概念によって説明するという点で、良い説明である。D.デイヴィッドソンは、根元的解釈に関する考察によって、この種の説明を与えようとしている。彼は、意思決定理論を利用し、それを自身の意味の解釈理論と合わせることで、比較的理解しやすい行為者の態度のパターンをもとに、意味（や命題的態度の内容）といった比較的理解しづ

らいものへと至る道筋を明確に示している(Davidson,1980,1984)。この論文のテーマは、デイヴィドソンのこの試みが成功しているかどうかを検討することである。

(2) 研究の背景・先行研究

根元的解釈とは、ある行為者が使う未知の言語を、彼のふるまいをもとに解釈することである。根元的解釈の方法を明らかにすることは、意味を前提としないところから、行為者のふるまいと、そこから知ることができる態度をもとに、意味を解釈する方法を明らかにすることである。それゆえ、それは意味についての説明となっているのである。

根元的解釈について考えるにあたって、デイヴィドソンははじめ、ある文を真とみなすという話者の態度を解釈の基礎として、意味の解釈を行うことが可能だと考えた(Davidson,1973,1974)。しかし後に、この考えが適切ではないと考えるようになる(Davidson,1980)。まずはその理由について述べる。

意味を解釈するためには、話者がどの文を真とみなすかということがわかっているだけでは十分ではなく、話者がどの文をどの程度の度合いで真とみなしているのか、ということがわかっているなければならない。つまり、信念の度合いが必要となる。では、なぜ意味の解釈のために信念の度合いが必要となるのか。それを理解するためには観察文と理論的な文の関係性を理解しなければならない。例えば、「太郎の叫び声を聞いてイノシシは逃げた」のような観察文は、ひとつの観察された事実から真であることがわかるが、一方で「イノシシは大きな音を恐れる」のように、理論的な文は、ひとつの観察された事実から真だとわかるわけではなく、証拠となるその事実によって真であることがある程度で支持されるようなものである。そして、理論的な文の意味は、どの観察文によって、その理論的な文が真であることがどの程度支持されるのかということによって決まる。他方、観察的な文の意味は、その文が真であることによって、どの理論的な文が真であることがどの程度支持されるのか、ということによって決まる。それゆえ、文の意味を解釈するためには、話者がある文を真とみなすことによって、別の文が真であることがどの程度支持されると考えているかがわかっている必要がある。そして、この支持の関係は、「ある文にたいする信念の度合いが変化するのに伴って他の文にたいする信念の度合いがどのように変化するかに着目することによって」知ることができる(Davidson,1980,p155)。以上の理由で、意味の解釈のためには信念の度合いが必要となるのである。

しかし、信念の度合いは、観察された事実からじかにわかるわけでも、真とみなすという態度をもとに解釈可能なわけでもない。そういうわけで、ある文を真とみなすという態度をもとに、意味の解釈を行うことはできないとデイヴィドソンは考えるようになる。

そして、意味の解釈のためには信念の度合いを知ることが必要となるので、意味を前提としないで信念の度合いを解釈することが必要となる。デイヴィドソンはジェフリーの意思決定理論をもとにして、その方法を明らかにする。

意思決定理論は、行為者の選好をもとに、信念の度合いを導く方法を示している。例えば、ラムジーは賭けについての選好をもとに、それらを導く方法を明らかにする(Ramsey,1950)。一方で、ジェフリーの意思決定理論は、命題が真であることに対する選好をもとに、信念の度合いと望ましさを導く(Jeffrey,1983)。ここでひとつ注意しておきたいのは、賭けについての選好のランキングは、賭けの結果(1万円もらえること)の望ましさのランキングをそのまま示しているわけではないのに対し、命題が真となることへの選好のランキングはそのまま、命題の望ましさのランキングとなるということである。

まずは、命題が真となることに対する選好から、信念の度合いと望ましさを導く方法に関するジェフリーの考えを大まかに整理する。まず、ある命題の望ましさについてジェフリーは次のように考える(Jeffrey,1983,p.78-79)。例えば「行為者が2番の馬に1万円賭ける」という命題が真となるケースは、その命題が真となるのと同時に、例えば2番の馬が1等になるケースや、2等になるケースや、3等になるケースや、…など、可能なケースはいろいろとある。そして、「行為者が2番の馬に1万賭ける」という命題の望ましさは、この命題が真となるそれぞれのケースの望ましさを、それぞれのケースの確率で加重平均したものとなる。この考えは直観的に支持できるように思われる。そして次の、望ましさ公理はこの考えを反映するものである(prob(A)はAの確率を、des(A)はAの望ましさを表す)。

。

prob(XかつY)=0、かつprob(XまたはY)≠0ならば、

$$des(XまたはY) = \frac{prob(X)des(X) + prob(Y)des(Y)}{prob(X) + prob(Y)}$$

望ましさ公理が述べていることは、両立不可能な命題から成る選言の望まし

さは、 X が真となるケースや Y が真となるケース（これらは両立しない）の望ましさを加重平均であり、そのときの加重は、それらのケースの確率であるということである (Jeffrey, 1983, p. 80-81)。そして、 $Y = \bar{X}$ とすると、 $(\text{prob}(X) + \text{prob}(\bar{X}) = 1$ なので) 望ましき公理から次の式が導かれる。

$$\text{des}(X \text{ または } \bar{X}) = \text{prob}(X)\text{des}(X) + \text{prob}(\bar{X})\text{des}(\bar{X})$$

そしてここから、次の式が得られる。

$$\text{prob}(X) = \frac{\text{des}(X \text{ または } \bar{X}) - \text{des}(\bar{X})}{\text{des}(X) - \text{des}(\bar{X})}$$

つまり、ある命題の主観的確率は、「論理的真理 (X または \bar{X}) の望ましさとその命題の否定の望ましさの間隔」と、「その命題の望ましさとその命題の否定の望ましさの間隔」の比となる (Jeffrey, 1983, p. 114-115)。

さて、選好のパターンから、これらの間隔の比較をおこなうことが可能なので、それによって信念の度合いを比べることができる。例えば、二つの命題の望ましさが等しく、(かつ、それらがともに論理的真理 (X または \bar{X}) よりも選好され)、かつ、それらの否定の望ましさも等しい場合には、それらの命題は同じ確率をもたねばならない。同様に、二つの命題の望ましさが等しく (かつ、それらがともに論理的真理 (X または \bar{X}) よりも選好され)、しかし一方の否定の方が他方の否定よりも選好される場合には、前者の確率は後者の確率よりも低い。適切な存在公理を加えると、これで、確率尺度を確立することができ、そうすればすべての命題の相対的な望ましさを確定することができる (Jeffrey, 1983, p. 113-115 / Davidson, 1980, p. 162)。

さて、デイヴィドソンの目的は意味理論を解釈することであり、意味を前提としないで信念の度合いを解釈する必要がある。それゆえ、ジェフリーの理論をそのまま使うことはできない。まず、ジェフリーのように命題が真となることを選好するという態度を解釈の基礎とすることはできない。というのも、命題とは意味なので、意味が解釈されていない段階では、行為者がどの命題を真とみなしているかがわからないからである。それゆえ、デイヴィドソンはジェフリーとは異なり、文が真となることに対する選好という行為者の態度が解釈の基礎となると考える。

そして、デイヴィドソンがジェフリーの理論を使うには、もうひとつ対処すべきことがある。信念の度合いを比較する際に、どのような選好が利用されていたのかをみればわかるように、信念の度合いの解釈のためには、文の否定や、論理的真理 (X または \bar{X}) を表す文を理解しているのでなければなら

ない。デイヴィドソンの場合、意味理論を前提としないので、これらの論理結合子と論理的真理を表す文は解釈されるべきものである。つまり、デイヴィドソンはジェフリーの理論を使うために、論理結合子（それをもとに論理的真理を表す文）を、文が真となることに対する選好をもとに解釈する方法が必要なのであり、そして彼は実際にそれを示すことに成功している（Davidson,1980,p.162-164）。以上、解釈の基礎を文が真となることに対する選好だと考え、加えてその基礎から論理結合子と論理的真理を解釈する方法を明らかにすることで、ジェフリーの理論を利用して、意味を前提とせずに信念の度合いを解釈する方法を、デイヴィドソンは明らかにした。

つまり、デイヴィドソンは、ある文が真であることよりも別の文が真であることを選好するという行為者の態度を解釈の基礎として、論理結合子、論理的真理、信念の度合い、望ましさの度合い、意味と命題的態度を解釈していく方法を示したのである。

(3) 筆者の主張

デイヴィドソンは、ある文が真となることよりも別の文が真となることを選好するという態度が、解釈の基礎となると考えた。この態度をもとに、信念の度合いが導かれ、意味が解釈可能となるという考えに問題はないように思われる。しかし、行為者がこの種の選好をもつかどうかということ、解釈者は、観察できる事実からじかに知ることができることには問題があるように思われる。つまり、選好のパターンがわかるとしたら、そこから意味を解釈することは可能だが、しかしその選好のパターンは、解釈の基礎として解釈者に利用可能なものではないのではないかと。

ドレスナーは、この観点からデイヴィドソンの考えが適切ではないと考える（Dresner,2014,p.711,726）。文を真とみなすという態度を解釈の基礎としようと、文が真となることへの選好を解釈の基礎としようと、解釈者が言語的なふるまいと非言語的なふるまいを区別できると前提することになるとドレスナーは指摘する。というのも、行為者がこの文を真とみなしていると解釈者がわかるためには、解釈者は彼のふるまいが、発話という言語的なふるまいであるとわかっていなければならないからである。しかしこれは不当な前提だとドレスナーはいう。というのも、そのような言語的なふるまいは、解釈の基礎として使えるほど統一的でも一様でもなく、観察可能なものではないからである。そして、同じ問題が、文への選好を解釈の基礎とする考えにも生じるのである（Dresner,2014,p.711,726）。

ドレスナーの批判は端的に言えば、文とそうでないものを解釈者が識別で

きると前提してしまうことは不当だというものである。私は、この批判は適切なものではないと思う。確かに、(根元的解釈の状況では)ある人が音を発した時に、それが発話なのかどうかが解釈者にはわかりづらい場合もある。例えば、うめき声や、驚きの声や、雄叫びをあげるような文脈では、それが意味のない音を発することなのか、それとも発話をしているのかということがわからないかもしれない。しかし、それらの場合を除けば、ほとんどの場合には、行為者のふるまいが発話であるかどうかを解釈者にはわかると考えることは、それほど不当なことではないように思われる。そして、通常文脈においてさまざまな文を知っていくにつれて、はじめは驚きの声や、うめき声をあげる文脈でも、文や語を発しているかどうか分かるようになるだろう。また、書かれた文や語に関しては、発話かどうかという問題と比べると、わかりづらい文脈はあまりないように思われる。このように、解釈者が文とそうでないものを区別できるというデイヴィドソンの想定はそれほど不当なものではないと思われる。

しかし、解釈者が文と、そうでないものを区別することができるとしても、文が真となることへの選好を解釈の基礎とすることには、なおも問題があるように思われる。というのも、その区別ができると考えたとしても、行為者の言語的なふるまいを観察するだけでは、文が真となることへの選好をもつかどうかということは、直接に知ることはできないように思われるからである。ただし、デイヴィドソンは、どういったふるまいをもとにすれば、行為者の態度がわかるかということについて具体的なことは述べていない。行為者の態度に関するデータは、「任意のベイズ的意思決定理論の実験によるテストで通常集められるデータと同じ種類のものである」と述べる(Davidson, 1980, p261)だけである。それゆえ私は、ありうる考えをいくつか想定し、それらがうまくいかないことを示す。

言語的なふるまいをもとに選好を知ることができるかを考える前に、まずは、非言語的なふるまいから文への選好を知ることができないということを確認しておく。例えば、目の前にうどんとそばが置かれている状況で、行為者がうどんを食べたとき、そのふるまいをもとに、彼の選好を知ることができるだろうか。このとき、少なくとも行為者は、自身がそばを食べるという事態が成立することよりも、自身がうどんを食べるという事態が成立することを選好していることはわかるだろう。しかし、このとき行為者が、どの文が真となることへの選好をもっていたのかはわからない。というのも、文に関する情報は何も得られていないからである。しかし、仮にこのことがわかるとしても、この方法にはさらなる問題がある。それは、行為者が実際に真

にすることができることだけしか選択肢にあがってこないということである。例えば、行為者が雨を降らせることや、東から太陽を昇らせることはできないので、それらの事態に関わる態度については何もわからないことになる。しかし、意味の理論を解釈するという目的のためには、すべての文に対する選好関係を明らかにしなくてはならない。それゆえ、この方法は適切ではないということになる。また、非言語的なふるまいからは、論理的真理に対する態度を導くこともできないように思われる。

次に言語的なふるまいをもとに選好を知ることができるかを考える。おそらく、態度を知るために必要だと考えられているのは、提示された文の一方を選択するというふるまいとなるだろう。例えばそれは、一方の文を指さしたり、一方を手にとったり、または一方の文を読みあげるといった行為かもしれない。しかし、行為者が一方の文を指さしたという事実から、彼がその文が真となることを選好しているとみなすことはできないように思われる。というのも、その文が真となることを選好するから一方の文を指したのではなく、例えば、未来の事態について教えてあげようとして一方を指さしたのかもしれないからである。「雨が降る」と「晴れる」という二つの文を提示されたときに、晴れることの方がより望ましいと考えている場合でも、明日の天気を聞かれたと思って「雨が降る」を選択する可能性があるだろう。このように、言語的なふるまいとそうでないものを解釈者が区別できるとしても、その事実から、文に対する選好を知ることができないように思われる。

以上の考察で明らかになったことは、ある文が真となることよりも別の文が真となることを選好するという態度を、行為者がもつかどうかを、解釈者が、観察できる事実からじかに知ることができないということである。それゆえ、文が真となることへの選好は、解釈の基礎として適切ではないということになる。すなわち、意味についてのデイヴィドソンの説明はあまり良いものではなかった。

(4) 今後の展望

デイヴィドソンの解釈理論は、基礎となる選好をもとに意味の解釈を行う方法を明らかにした。しかし、基礎としてあげられた選好は、解釈者が観察できる事実からじかに知ることができないので、解釈の基礎と考えることはできない。では、どういった代替案が可能だろうか。ひとつは、文が真となることへの選好を解釈する方法を新たに明らかにすることで、デイヴィドソンの理論をそのまま利用することである。デイヴィドソンの理論は、文が真となることへの選好から意味の導出に関していけば問題がないように思われ

るので、この選好の解釈方法を付け加えることで、解釈理論を完成させるという方針である。もうひとつの方針はドレスナーが示している(Dresner,2014)。言語的なふるまいも、非言語的なふるまいもどちらも解釈の基礎となり、また、個人のふるまいだけでなく、言語共同体内の各ふるまいが解釈の基礎となる、という新たな考えを示している。ただし、それがどういったふるまいなのか、ということについては詳述されていない。これらの方針をより明確に示していくことが必要とされる。

(5) 参考文献

- Davidson, D. 1973, “Radical Interpretation”, In Davidson 1984a, pp. 125-139.
- Davidson, D. 1974, “Belief and the Basis of Meaning”, In Davidson 1984a, pp. 141-154.
- Davidson, D. 1980, “A Unified Theory of Thought, Meaning and Action”, in Davidson 2004, pp. 151-66.
- Davidson, D. 1984a, *Inquiries into Truth and Interpretation*. Oxford: Clarendon Press.
- Davidson, D. 1984b, “Expressing Evaluations”, in Davidson 2004, pp. 19-37.
- Davidson, D.2004, *Problems of Rationality*. Oxford: Oxford University Press.
- Dresner, Eli. 2014, “Decision Theory, Propositional Measurement, and Unified Interpretation”. *Mind*, 123,491, pp. 707-732.
- Jeffrey, R. 1983, *The Logic of Decision*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Ramsey, F.P.1950, “Truth and Probability” in *The Foundations of Mathematics*, New York.

(九州大学)